

烏丸綾小路遺跡の石包丁

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した石包丁と未成品

はじめに からすまあやのこうじ 烏丸綾小路遺跡は、京都盆地の弥生時代を代表する集落遺跡です。平成29年から30年にかけて実施した京都市立下京雅小学校地内の発掘調査で、弥生時代前期末葉から中期前葉の集落や水田跡から、製作・使用された石器が多数出土しました。

石包丁とは 人類と石器の関わり合いは古く、日本列島では旧石器時代には、すでに石器を使う人々が活動していました。

はじめは石を打ち欠いて作った簡素な道具でしたが、人々の生活に適合するように、さまざまな工夫が加えられていった結果、機能

に応じたいろいろな石器が作られるようになりました。金属器が普及しはじめる弥生時代後期まで、人々にとって石器は、生活に欠かすことができない主要な道具であり続けました。

長い歴史をもつ石器の中で、弥生時代の遺跡からは発見されるものの、その後は作られなくなった道具のひとつに石包丁があります。

石包丁は、平面形が半月形や楕円形、長方形の扁平な石器です。長辺の一方には刃が付けられており、持ち手側には2個ないし1個の孔あなが開けられています。一般的な石包丁は、砥石などで表面を磨

いて凹凸をなくした、いわゆる磨製石器として製作されています。

石包丁は、日本列島だけでなく、中国大陸や朝鮮半島にも分布しています。中国大陸では新石器時代



図1 石包丁の使い方

(紀元前 5,000 年～前 2,000 年)、朝鮮半島では無文土器時代(紀元前 1,500 年～前 300 年)、日本列島では弥生時代前期から後期(紀元前 600～50 年)まで製作・使用されていました。

石包丁の用途 石包丁という名称は、北アメリカ大陸の北方地域の先住民が使用していた調理用の包丁に形態が似ていると、明治時代の研究者が指摘したことに由来します。

しかし、その用途は、肉や魚を切るのではなく、稲などの穀物を収穫するための道具です。朝鮮半島から稲作とともに日本列島に波及しました。

使い方は、石にあけた孔に紐を通し、そこに指を入れて握り、穀物の穂をむしるように切り取るというものです(図 1)。鎌で根元から刈り取る方法と比べて手間がかかるように思えるのですが、当時の稲などの穀物は、同じ場所でも実りの時期にバラつきがあったため、収穫には取り入れに適した穂だけを選別して刈り取っていました。実った穂から順に刈り取る方法ができる石包丁は、当時の収穫方法に適した道具であったのです。

石包丁の製作 烏丸綾小路遺跡からは、完成した石包丁だけでなく、作りかけの石包丁(未成品)が多数出土しました(写真 1)。出土した未成品の数量は、この集落で必要とする量をはるかに超えており、この遺跡は石包丁の生産地であったと考えられています。

出土した石包丁の大多数は、粘板岩と呼ばれる黒い石材を使用し

ています。粘板岩は、泥が堆積してできた岩石の一種で、薄く板状に割れる性質があります。この粘板岩は、近畿地方北部に広く分布する丹波層群と呼ばれる地層から採取できる岩石であるため、京都盆地周辺では珍しいものではありません。しかし、烏丸綾小路遺跡が所在する京都盆地中央部からは、石包丁に加工できるような大きな石材は産出しません。遺跡とは別の場所から石材を入手したことは間違いのないでしょう。

石材を獲得した後は、【①粗割】粘板岩の特徴である薄い板状に割れる性質を利用して、石材を扁平な形に整える→【②剥離整形】石材の周辺を細かく割って石器の形を整えていく→【③研磨】表面の凹凸を砥いで磨く→【④穿孔】手に固定する紐を通す孔をあけるとい手順を経て(写真 3)→【⑤完成】となります(写真 2)。

また、各段階の未成品とともに、②の形を整える段階で生じた石くずや、④の段階で孔をあけるときに使ったと考えられる石錐(写真 3)が出土しました。これらもまた、この遺跡で石包丁が製作されたことを示す証拠と言えるでしょう。

おわりに 烏丸綾小路遺跡から出土した石包丁とその未成品は、この集落で稲作が行なわれていたことを示すだけでなく、遺跡とは別の場所から石材を入手して、製作した石包丁を、さらに別の集落へ供給する拠点が、この場所にあった可能性を示しています。

狩猟採集生活を中心とする縄文



①粗割



②剥離成形



⑤完成

写真 2 製作手順



写真 3 ④石錐(矢印)と穿孔

時代の人々とは異なり、弥生時代の人々は、稲作を^{なりわい}生業とすることによって、ある一定の土地に強く結びつく社会を作りあげていました。そのような社会の中で、石包丁のような日々の生活に必要な道具が、どのような形で人々に流通していくのか、その仕組みを捉えることが、弥生時代を考える上で必要な視点のひとつとなるでしょう。(中谷正和)